

江戸の見立化物

——『妖怪物狐心学』、心学の化物

門脇 大

はじめに

江戸時代には様々な分野に化物が登場する。文学作品をはじめとして、錦絵などの絵画資料や歌舞伎・浄瑠璃といった演劇、または玩具や民芸品等々、多様な分野である。それらに関する研究や報告も数多く蓄積されている。とはいえ、それらのすべてが脚光を浴びているわけではない。江戸時代の資料はまだ埋もれている。本稿では、これまであまり注目されてこなかった「心学」の化物を検討してみたい。

「心学」とは、近世中期に石田梅岩いしだ ばいがん（1685-1744）によって創始され、全国に広まった儒教・仏教・神道・老荘の思想を取り入れた人生哲学ならびに社会教化運動のことをいう。道話という講釈法が発達し、平易に日常倫理や教訓を説いたものが多く、数多くの心学書が著されている。そして、心学の教えを説くために多くの例話が用いられており、風俗資料としての側面も持っている。絵入り本も多く、中には化物を描いたものもある。それらは、基本的に市井の人々への戒めや教訓と結びついており、いわゆる化物話とは異なる趣がある。

心学における化物話は、二つの系統に大別できる。一つは人の恐怖心がありもしない化物を誕生させるというものであり、いま一つは人の心情や行動を化物に見立てるといふものである。なお、両者は厳密に区別できるものではなく、ともに述べられることも多い。本稿では後者について検討したい。心学の化物を検討してゆくことにより、従来はあまり注目されてこなかった化物観・怪異観の一端を明らかにし、江戸時代の多彩な化物の魅力を探ってゆくこととしたい。

1 『妖怪物狐心学』「見立化物」

穴閤軒ここんばけものきつねしんがく『妖怪物狐心学』（寛政12年[1800]序、文化11年[1814]奥書、タテ25.8×ヨコ15.7センチ）は、矢口丹波記念文庫（群馬県高崎市）に収まる上下二巻二冊の写本である。現在のところ、他に伝本を確認することはできない。また、筆者についても不明である。この作品は、書名に表れているように、「心学」の教えを説く教訓書である。注目すべきは、上巻の前半部に「見立化物」として10体の化物が絵入りで紹介されている点である。そして上巻の後半部では、その化物たち

が王子に住む白助狐に連れられて、人が人を化かす様子を見るという筋となっている。下巻は、白助狐が化物たちに心学の教えを教授するというものであり、教訓書としての性質が強く表れている。

本稿では、『妖物狐心学』上巻に記されている「見立化物」を検討してゆくこととしたい。半丁に化物の絵が描かれており、その後に化物の説明が記されている。他の分野の作品に描かれる化物とは、相当に異なる描写が見受けられる。以下、順に検討してゆく（便宜上、通し番号を付けた。はじめに化物の名称を挙げ、次に本文を引用し、引用者の解説を記す）。

①見越入道^{みこしうどう}

此妖物は、八宗の僧にあり。言句文字を知りて悟りと思ひ、私心を捨る事を得ずして、大乘に至りては、呑たき物を呑さるは帰而罪也と大酒を呑。一戒やふれは五戒乱て、後家、娘に迷ふやら、建立事にかこ付金もうけをするやら、御仏の御心を見こし入道。つれ〜草に、君子に仁義有り。仁義よつて身を失ひ。僧に法有り。法によつて身を失ふの類多し。心学者に本心有り。本心にとり付て迷ひ、文学を見越入道。又、見こし女とて、嫁のおもはぬ事を見こし、姑の心を見こすの類。御用心〜。



図1 見越入道

見越入道とは、墮落した僧の見立てである。私心を捨てることができずに飲酒の罪を犯し、その後は色欲や金儲けに溺れて仏の心を「見こし」てしまう入道のことと説明される。『徒然草』第九十七段を援用している。君子は仁義に、僧は法によって身を失うことが多いという。つまり、それぞれの最重要事によって身を滅ぼすことが多いというのである。そして、心学者は本心にとりついて迷い、文学を見越してしまうという。さらに、「見こし女」といって、嫁や姑の心を「見こす」者も挙げている。

なお、文末の「御用心〜」は序文末尾にもある警句であり、以下の「見立化物」の末尾に共通して用いられている。人を化物に見立て、そのような人にたぶらかされたり、本人が化物になってしまったりすることのないように、という警句である。

②一つ眼^{まなこ}

此妖物は、儒仏神諸芸の師、己を立て人を誹るの類多し。是を名付て、手燭学者と云。燭台は元くらしといへとも、天地四方を照らし、自在の通用至り、己

が道斗にて他を知らず。一以貫之に至らされは、一つ眼の妖物となる也。たとへて曰は、誹諧の宗匠、我のみ正風也心得へ、他の風を謗也。翁門十弟の人へも、或骨をとり、或は肉とり、或実を取り、風情をとり、其風替へるといへとも皆はせをの風流なり。又、文学者は心学を謗り、心学者は文学誹。皆、一つ眼の妖物也。子曰、文質彬々^{テニ}然後君子也。御用心へ。



図2 一つ眼

一つ眼の妖物（化物）とは、自身の学んだ道のみ固執し、他を顧みることのない人の見立てである。特に、宗教者や諸芸の師匠らは自分を立てて他人を誹^{そし}ることが多く、この化物に見立てられている。例として誹諧の宗匠が挙げられている。また、「文学者は心学を謗り、心学者は文学誹」とある。ここでは、文学者と心学者が明確に区別されている点に興味深い。お互いが誹謗し合っているというのである。末尾の「子曰、文質彬々^テ然後君子」は、『論語』「雍也篇」に出ており、教養と人の実質との調和を説いている。

なお、「一以貫之」とは、『論語』「里仁篇」「衛霊公篇」にある言辞であり、一つの道理で万事を貫くという意味である。本書の後半にも繰り返し引用されており、筆者が心学を説く際に重視している言辞であると考えられる。

③轆轤首^{ろくろくび}

此妖物は、首の筋ぬけ出し、其長き事を知らずといふ。吉原の首か大坂迄とゞき、嶋原の首か江戸迄もとゞき、目のさきにちらつく也。若き人、此妖物出合、此首に笑れば、臣は君を忘れ、君は国を忘れ、子は親に孝を忘れ、金銀家財身心迄、此首のために失ふ人多し。御用心へ。



図3 轆轤首

轆轤首とは、首の筋が抜け出し、その長さを知ることができないものだといふ。吉原の首が大坂まで、嶋原の首が江戸までも届くという。そして、この化物と出会い笑われると、倫理観を失って骨抜きにされてしまうというのである。明確に書かれているわけではないけれども、吉原と嶋原という著名な遊郭から伸びる首というのであるから、轆轤首とは遊女を見立てたものと考えられる。遊女に財産を取られないように気をつけよ、という教

訓である。

④^{もんぐわあ}毛々怪

此妖物は、ゆもじの中より毛をかむりたる女の首斗の姿也。男子は、此妖物の為に多くは金銀を失ひ、家財身心迄喰るゝ也。本心に立かへり、よく〜本体を見しらは、却而妖物の為に身納る事もあるへし。古歌に、
恋といふそのみなもとを尋ればばりくそ穴の式つ成けり
男女のまじはりは国の常なりといへとも、此妖怪に心をとろかさるゝ事なかれ。御用心〜。



図4 毛々怪

毛々怪とは、ゆもじ（ゆかたびら、腰巻）の中から毛を被った女の首だけの姿だという。男子はこの化物によって金銀・家財・身心を食い尽くされてしまうけれども、その本体を見極めると、かえってその身を修めることもあるという。歌の大意は、恋の源は結局のところ交合にある、というほどのものである。男女の交わりに溺れるなかれ、との教訓である。この化物も明確に書かれているわけではないけれども、女陰を見立てたものと考えられる。好色・色情への戒めである。

⑤^{ゆうれい}幽霊

禅の知識の曰く、死た幽霊を見ず、生る幽霊は常にみたり。それにござる人〜、多くは幽霊也と申せしとかや。古へより聞伝るに、幽霊に足なし。足なき人は道を行事不叶。道とは五輪五常の道也。人として此道を不行は人にあらず。幽霊也。又、足の字は、たると読也。足る事を知るを人といふ。足る事を知らざるも幽霊なり。御用心〜。



図5 幽霊

幽霊とは、人の道に外れた人の見立てである。幽霊には足がなく、道を行くことができない。道とは五輪五常の道であるから、その道を外れた人はもはや人ではない、というのである。また、幽霊にない「足」という字は「たる」と読むことから、幽霊とは足る事を知らない人のことでもあるという。五輪五

常を守ることと、欲心への戒めと考えることができる。

⑥ 豆腐買小僧 とうふかいこそう

此妖物は、十式、三才の頃より夜遊びを好み、常に子共の中に遊はず、若者にましはり、夜ふけに豆腐や酒の使_ルなとして居る化物也。子をそだつるは親の慈也。然に、愛におほれて気まゝにそたてなは、かならつ此妖物と成_ルへし。子共の罪を十に割は、親に七つ罪有りといふ。幼少時より五輪のましはりを教、家業を習する事かん要也。もし親々少しもゆるかせになさは、此化物と成_ルへし。御用心へ。

豆腐買小僧とは、少年の頃から夜遊びを好み、夜更けに豆腐や酒の使いをする化物のことだという。黄表紙などに見られる「豆腐小僧」を連想させるけれども、ここでは独自の解釈が展開されている。ここで説かれているのは、子育てをする親への教訓である。甘やかすばかりの子育てでは豆腐買小僧になってしまう。幼少の頃からの教育を十分に行う必要を述べており、五輪の交わりや家業を教えるべきであると説いている。



図6 豆腐買小僧

⑦ 逆女 さかさまおんな

女は和順にして、やはらかにしたかうは女の道也。然に、夫をさしおき、世の中の事も我知り顔にちよへへと口をきゝ、己か夫を下男のようにけなし、万事を心の任になすを逆女といふ也。男は天にして陽也。女は地にして陰也。天は高く、地は天のめくみをうけて万物をうみ出し、女は男のなさをうけて身を納。男女和合して家とゝのふの道也。然に、男のうへを行女は、逆に行にひとし。このゆへに、逆の女といふ化物と成_ル也。御用心へ。

逆女とは、夫に従わず、思うままに振る舞う女性を見立てた化物のことである。女性は男性の情けを受けて身を納めることができるのであり、男女の和合によって家庭の平和が保たれる。男性の上をいく女は、その考えに逆行しているというのである。現代の観点からすると、



図7 逆女

女性蔑視とも映る描写であろう。しかし、江戸時代においては特別に差別の意識などはなく、きわめて一般的な価値観であるといつてよい。逆女とは、男性を女性よりも上に見るといふ、江戸時代の一般的な通念に逆らう女性の見立てである。

⑧ ^{うみぼうず}海坊主

海坊主は、膿ほうす也。昔は都にはかり有りしよし。今は里—山—にいたる迄出る也。膿坊主、眷属にかさの神といふ神有り。もらへ—、御屋敷さん、町人さんと鳴。此神にとり付るゝと、頭上よりも目鼻よりも膿汁流れ出て、髪の毛はぬけ、そのまゝ膿坊主と成也。つゝしみの第一は、男女の道。とりわけ遊女のたはれ事に心をとろかす事なかれ。御用心—。

海と膿^{うみ}の音通から、海坊主は膿坊主であるという。昔は都だけにいたが、今はどこにでもいるという。その眷属^{けんぞく}には、かさ（瘡=疱瘡）の神がいるという。この神に取り憑かれると、頭や目鼻から膿が流れ出てとろけてしまうという。慎みの第一として挙げられるのは、「男女の道」といい、特に遊女の戯れ言に気をつけよというのであるから、性病を煩った者の見立てと考えられる。



図8 海坊主

⑨ ^{ゆき}雪女

或^ル社人の物語に、頃は十二月中しゆん。大雪降つもり四方の通路もとゝまり、殊にしんかうにおよび、神前の鐘の音に眼を覚し見れば、年は十七、八才の娘、白小袖を着て髪をちらし、ふりかへり、社人と見合につこりと笑し顔のうつくしきほど、そつと身にしみ、また、おそろしく覚へ侍りし也。是は、雪にてこゝへ切へしと物語也。雪女を足なしの姿絵書は、これらの女をいふへけれ。若き女子、親のゆるさぬあく姓をはたらき、此世から雪寒地獄に落入へし。つゝしむへし—。御用心—。



図9 雪女

ここでは、ある社人の物語を紹介している。12月中旬の大雪が積もった日の深夜、社人が鐘の音に眼を覚ましてみると、17、8歳の娘

が髪を散らして振り返り、その笑顔に恐怖を感じたというのである。ここまでは怪談である。しかし、続く行文では「是は、雪にてこゝへ切へしと物語也」とあり、娘が寒さに凍えきっていたと、その正体を明かしている。最後に、若い娘が親の許さない「あく姓」を働くことを戒めている。雪女とは、親の諫めを守らない娘の見立てである。

⑩三つ目入道

此妖物に、欲目、瞋目、痴目とて、とんじんちの三つ目有り。物いふにくせ有り。おれが〜といふ。又、見詰入道共いふ。嶋の才布に五拾両有り^{みつめ}と見詰ると、一刀にさしころし、其金を取り、美しき女房と見詰ると、小夜衣の歌をにくみ、夫を失ん事をたくむ。または、人の落身に成ると見詰ると、鉄のぼうてつき出し、誠に恐しき化物故に、世の人妖物の親玉也とおそるゝ也。御用心〜。



図10 三つ目入道

三つ目入道には二つの解釈がなされている。一つは、貪瞋痴（三毒、むさぼること・怒ること・迷い惑い理非のわからないことの三つの煩惱）という三つの目を持つ化物という解釈であり、心学において頻繁に説かれる教えである。もう一つは、「見詰入道」という解釈である。見詰入道の見詰める先には、他人の金や、美しい女房、また没落しそうな人があり、非情な手段を用いてそれらを自分のものにするというのである。これまで見てきた①～⑨の化物は、基本的には自身を痛めて化物となった者たちであった。しかし、この三つ目入道は異なる。この化物は、自分のために恐ろしい手段を用いて他人を^{おとし}貶めようとするからである。世の人は化物の親玉といって恐れると記されていることも、この点からであろう。

ここまで検討してきた「見立化物」とは、当時の社会通念や倫理観から外れた人を化物に見立てたものであった。趣のある絵とともに、平易な教訓話として化物の説明がなされている。この作品は、他の近世の化物を描いた絵本や、文芸作品とは明らかに異なる心性から生み出された作品であるといえるだろう。これほど如実に化物と教訓が結びついている作品は他に類を見ないのではないか。

ただし、単純にその希少性のみにも価値を見出したいわけではない。この作品は、近世の化物観・怪異観を明らかにしようとする際に、注目すべき怪異認識の方法を備えている。すなわち、人の道を外れた人々は化物という認識である。もちろん、心学に描かれる化物の性質が、文芸作品の化物の性質と異なるのは当然といえる。

化物が描かれていようとも、著された目的がそもそも異なるからである。心学資料の大前提としての教訓が常にあり、その教を説くために描かれた化物なのである。しかし、心学は近世中期以降、全国的に流行しており、近世の人々の心性を鮮明に映し出している。このように考えると、近世の化物観・怪異観の一端が心学に如実に表れているといえる。心学の化物を検討してゆくことにより、その多様な実態に迫ることができるだろう。

以下では、心学書の「見立化物」の事例をさらに検討し、上述のような怪異認識の方法を追究してみたい。

2 心学の見立化物

ここでは、人を化物に見立てる心学の話のうち、特に絵入りの作品を検討して、その意義を追究してみたい。まず、脇坂義堂『やしなひ草』初篇（天明4年〔1784〕刊）を見てみたい。本書では、市井の様々な営みが絵入りで紹介されており、道歌を交えて平易に教戒が述べられている。ここでは、下巻に記されている一話を見てみたい。まず、「鬼の相」と題された鬼の絵に次の道歌が添えられている（図11「やしなひ草①」）。



図11 やしなひ草①

よこしまな人のこゝろが此かほとして大津の絵師か書
たの

よこしまな人の心がこの顔（鬼の顔）と知って大津絵師が描いた、という明瞭な歌意である。そして、本文は次のように記されている。

青筋のひたいに角があらはるゝ内に、ねたみのとがりあるから、世の人の悪事を見出す姿とて、眼玉こそ大きなりけれ。忠孝の人をばあしくいふ口は、大きに耳の根までさけつゝ、ばりへと人をかんだり人の気をいためるゆへに、おそろしき牙、何もかもつかまんとする欲心を手足の爪のながきにぞしる。指を見よ、貪欲瞋恚愚痴の三つ、慈悲と知恵との二つなき也。よき人をよせもつけねは、体中はへ出る毛まで針のやうなり。身ひいきのたくましいから、たくましいからだを出来し苦しみぞする。虎の皮の褌をこそしたりけれ。悪事千里を走るしるしに。
○凡人、身におこなふ所と意におもふ所とを此うたにひきあはせ見給は、鬼の相をそなへざるはすくなかるべし。しかれども、唯他事にのみきゝなし、

わが たち ひと またおほ をしへ わが み ひき きか
 我身に立かへり見る人、又多からず。すべて教は、我身に引うけて聞ざれば、
 こじん きんげん そのあきさら ねがは もろへ ひと これ
 古人の金言といへども、其益更にあるべからず。願くは諸の人、是をおもひ
 給へ。
 おに しよさ おに こゝろ もち み じやき
 鬼の所作鬼の意を持たながらよそごとに見る人こそは邪鬼

絵と道歌とによって示された、よこしまな人を鬼に見立てた様子をより細かく、具体的に述べている。鬼の角は嫉む心が尖ったものであり、「世の人の悪事を見出す姿」であるから目玉は大きいのだという。忠孝の人を悪く言う大口、人を傷つける牙、大きな欲心を表す爪の長さ、鬼を象徴する各部位を不誠実な人の所行に見立ててゆく。また、鬼の指が三本であるのは、貪欲・瞋恚・愚痴を表しており、慈悲と知恵がないために二本欠けているのだと説く。体中の針のような毛は善人を寄せつけないために生えたものであり、身びいきがたくましいから、体もたくましく、そのために苦しむという。さらに、虎の皮の褌は悪事は千里を走る印だというのである。そして、多くの人が上述の鬼の相を備えているという。このことを他人事とするのみではなくて、自身に引き受けて心得よという教訓で結ばれている。末尾には、次の道歌が絵とともに記されている（図12「やしなひ草②」）。



図12 やしなひ草②

われといふ心の鬼がつのりなば何とて福は内にあるべき

歌意は、我という心の鬼が昂じれば、どうして福は内にあることができようか、というものである。我意を心の鬼としており、ここでも見立てが行われていることが確認できる。

次に、同じく脇坂義堂の『民の繁栄』（寛政8年〔1796〕刊、引用は『あつめ草』三篇〔安永・天明頃<1772-1789>刊〕六より）を見てみたい。五之巻には「見越入道」が描かれている。見越入道は『妖物狐心学』でも見立てられていたけれども、ここでは異なる見立てが行われている。老人の話として、以下のように記されている。

○老人の曰。むかし見越入道と異名せる人あり。此男首を述す時は。雲に入
 ばかりにて。其首の高くのびる事言語に絶たり。故に此男人に対して。常に自
 慢しけるは。我首を述す時は。日月を下目に見るほどの事なれば。唐土天竺は
 いふに及ばず。万国を只一目に見ぬくなれば。何国の浦々嶋々にて。我知ら
 ざる事一つとしてなし。然るに世の人は。皆井の中の蛙にて。我見しところの。

万部まんぶ一いちも知しる事ことなしと。自慢じまんしければ○此男このおとこが友ともなる人ひと。傍かたはらにありて云いけるは。然しからば其元そのもと只今ただいま。唐土からてんちくにはいかなる事ことの候かたや。早く一目ひとめ見て。語かたり給あたはるべしといふ○入道にうどう打うちうなづきいと心安こゝろやすき事ことなりと。例れいの自慢じまんの首くびを高く述たかしていはく。唐天竺からてんちくはいふに及およばず。万国ばんこく一度いちどに明白めいぱくに見みえて。おもしろさ限りなし。汝等なんぢらは此この楽たのしみを。かりにもしらぬうづむし同前どうぜんにて。誠まことにふびんの至いたりなりと。高言かうげんいたしければ○彼友かのともなる人ひとはらを立たて。余あまりにくき高言かうげんなりとて。両足りやうあしをととりて打倒うちたおし。彼永かのながき首筋くびすじにまたがりて曰いふ。汝万国なんぢばんこくを一目ひとめに見ぬく程ほどの知れ者しが。我が如ごとき愚盲ぐもの者ものに打倒うちたおされて。難義なんぎせしはいかにといふ○入道にうどうせつなく答こたて曰いふ。我万国わればんこくを唯一目ただひとめに（図 13「民の繁栄」）見ぬくといへども。悲かなしき事ことは。我首わがくびの高く述たかびるに随したがひて。肝心かんじんの足本あしもとが遠とをくなりて。見る事みあたはず。汝なんぢは遠とをき事ことを見る事みあたはずといへども。近ちかき足本あしもとが見みゆる故ゆへに。我われに勝かちし以もつ所ところなり。爰ゆゑを思おもへば汝なんぢが如ごとく。文盲もんもうたりとも。足本あしもとのみゆる方かたが大おほにましなり。我如わがごとく唐土からてんちく天竺てんちくを見ぬくといへども。足本あしもとが遠とをくして見みへざれば。かゝるうき目めにあふ物ものなりと涙なみだを流ながしてわびけるとかや。

見越入道と異名される男の話である。この男は、首を伸ばせば雲を突き抜け、遠く万国を見下ろすことができると常に自慢し、驕っていた。ある時、友に万国を一度に見ることの楽しさを自慢し、それが叶わない世人を嘲った。友はあまりの高言に腹を立て、両足を取って打ち倒し、首筋にまたがり、次のように問うた。「万国を見抜くほどの者が、どうして自分のような愚盲の者に打ち倒されるのか」



図 13 民の繁栄

と。見越入道は、「万国を一目で見抜くことができても、首が伸びると肝心の足下が見えなくなってしまう。あなたは遠くを見ることができなくとも、近くの足下が見えるために私に勝つのだ」と答えた。さらに続けて、文盲であっても足下が見えることは、遠く唐土・天竺を見て足下が見えなくなるよりも大切である旨を述べて、泣いて詫びたという話である。本文は次のように続いており、見越入道とはどのような人を見立てたのかが明らかになる。

此はなしおかしき事ことにて。世よには遠とをき唐天竺からてんちくの群書ぐんしょに渡わたりし。博学多識はくがくたしきの人々ひとらに。かんじんの身みを治おさむる。あし本あしもとの見みへぬ。学者がくしやの見越入道みこしにうどうもあり。又諸芸何しよげいなに

にも功者にて。近き足本の家業にうとき人も有。表の事には首をさしのば
 して。我足本のみさをを守るに。おろかな内儀の見越入道もあり。其外色々様々
 の。見越入道多くして。我足本を見るものは。むかしも今もすくない物じやげ
 な。道は近きにあり。然るに人遠きをもとむるとやらんも此事歎。自伐者
 無功自矜者不長

見越入道とは、唐天竺の群書に通じるほどの博学多識でありながら、その足下を見ることができない学者を見立てたものであった。さらに、他の諸々の事柄についても、先を見て足下をおろそかにする人々が見越入道に見立てられる。このような見立ては、当然のことながら教訓が主題である。最後に『老子』『苦恩篇』を引用して、人の傲慢を戒めている。

このように、心学書の中には、人を化物に見立てる「見立化物」を認めることができる。また、さらに心学書を細かく検討してゆけば、ここで取り上げた資料の他にも数多く指摘することができる。心学書には、人々に恐怖を与える怪談・怪異小説とは異なる化物が描かれていることが明瞭に認められる。心学書に描かれている「見立化物」は、当時の倫理観に外れた人々であり、そのような人々への戒めである。近世の怪異観を俯瞰しようとする時、このような教訓を託した化物が数多く描かれていることを看過することはできない。この点を追究するためにも、さらなる具体例を心学書の中から探ってみる。

3 百物語の見立

次に検討してみたいのは、単体の化物に見立てたものではなく、「百物語」に見立てたものである。この系統の作品として、すでに村井由清『教訓百物語』（文化12年〔1815〕刊）が翻刻紹介されている（太刀川清校訂『叢書江戸文庫 27 続百物語怪談集成』、国書刊行会、1993年）。『教訓百物語』においては、百物語とは人の本心を見立てたものである。すなわち、人の本心は、はじめは無垢で明るけれども、成長するごとに穢れて暗くなってゆく。その様子を、はじめに灯した灯心を徐々に消してゆく百物語に見立てているのである。

ここでは、『教訓百物語』のように人々の姿態を百物語に見立てる話を検討したい。和田耕斎『今昔道の葉』（嘉永2年〔1849〕刊）中之巻の一篇である。本文の途中に見開き一丁分の挿絵があり、「百物語 怪異をあらはす」と記されている。はじめに、百物語の説明が次のように記されている。

今はむかし、百物語といふ事をせしが、広き座敷に灯心草一筋入て灯し、
 遙 此方若き人集り恐しき話をして其灯心草を一すじ減し、又恐しき話を一
 つして灯心草を一筋減し、段々話の数重り、次第に灯心草へり、話の終りに

悉く灯心草尽れば闇夜となりて、種々の化物が出て人を苦しめ悩まし、いのちを取ると語り伝へたるとなり。
 語曰 禍福無_下不_二自_レ己_レ求_レ之_上者

〈わざはひさいはひともにわがこゝろよりいでざることなし〉

言い伝えとして、百物語の説明が記されている。百筋の灯心を灯し、怪談一話につき一つ火を消す。すべての火を消した時、様々な化物が出て命を取るという説明であり、伝統的な百物語怪談会の説明であるといえよう。そして末尾には、『孟子』「公孫丑章句」上の言辭が引用されている（返り点は原文ママ）。禍福はともに自身が求めるものである、というこの言辭は、直前の百物語怪談会の説明とは無関係のように見える。しかし、この後に続く百物語の特異な解釈を暗示している。本文は次のように続いている。

此物語は、幼稚の者の耳に残りて空事のやうに思へども左にあらず。全く教のためにて、今もかやうの事俣あり。①すべて人々の禍や福は、天より来らず地よりも湧ず。皆吾心より是を求めて、或は悲しみ、亦は喜びて生涯を渡る事なり。夫を迷ふ人の心からは、福も禍も余所から来るやうに思ふはいとはかなき事そがし。又、稀に天のなせる孽にて、或は洪水、又雷火などもあれど、是は十に七八はのがるゝ道もあるべし。自ら心よりなせる禍は、十に一も逃るゝ道なし。深く恐れ、厚く慎むべし。②世の人の家名滅亡に至るも、子孫の奢りより生ずる事なり。先祖は西国、或は四国、九州より都、浪華などへ僅の縁を求めて動競に出奉公するか、人に雇はれ、時折には恥をも忍び、苦しき事も辛抱し、三伏の夏の日も玄冬の霜雪にも、昼夜を分たず粉骨碎身して勤め働らき、身には儉約質素をまもり、人に謙遜、十分堪忍の切積りて富昌へ、むね高き家をもとを求め、何不足なき身代も、子孫の末にいたりては次第へに奢に長じ、先祖の恩も住の江の岸に生るや忘れ草、日にへ放蕩の手遊びは、花の水ぎは茶の手前、足拍子の笛太鼓、其数々の家蔵も打崩すべき勢ひなり。祖父は昼夜に動競だが、孫は夜昼色と酒、氣随肝積我俣が、積りへし（図14「今昔道の栗」）あげくには、節季師走の払ひにも、ぎつちり詰り、右の通りが左まへ、逃つ隠れつして見ても、果しなければいつにか胆が太ふなり、悪い工みの相談に寄来るものは、同じ類ひの放蕩穀盜転宿浪人風来もの。いつもこつそり四畳半、はなす模様は世の人の、ふるひ懼がる恐ろしい、山や海の計較か、或はまだへ恐ろしい物の贖事取込や、種々恐ろしい話して、③先祖の徳の光りたる、其灯心草を一筋づゝ、日々々々に減すゆへに、光りも細く今日の日の、其朝夕の煙さへ、細へだにも立かねて、終には光消尽せば、其まゝ家は他人のもの。永き住居に離るゝは、哀れといふも愚なり。斯成行も、④其人の心持から化物ずき好のしるしなり。古人曰、国家將に亡びんとする時必ず妖孽くあやしききざ

し>ありと。宜哉。其化物の中にも、⑤轆轤首とて、色白く鉄漿もくろ
 へ口元は、いつも莞爾人を見毎笑顔。可愛らしきは身にこたへ、骨にしみ
 附あれならば、家蔵どころか命まで、打込ほどの化されやう。金の工面につまり
 ては、何様金でも借つもり。利足口銭、高入道。長い舌にてなめ廻され、六
 月めへなめられて、大きな眼で家蔵を白眼落しに来る化もの。一家親類知音
 まで、寄附ものは一人もなき化物屋敷と成ぞかし。まだ其上に、⑥蔵の諸道具、
 夜着ふとん、膳椀燭台吸もの椀、銚子盃煙草盆、皿鉢火鉢に至るまで、手
 足がはへて動き出し、主人の顔をつくへと、恨めしそふに打詠め、おまへの
 心ひとつから、今是、他人の手へ渡り、憂かんなんの恥さらし。よし売れな
 んだら店ざらし。いかい苦労を致しますと、言ねど夫と哀なり。世に某の館
 跡、たれがしの屋敷跡とて、狐狸の住所となるも、全く道を聞ざるゆへ、
 末代までの語り草。実々悲しき事ならずや。⑦必ずへ、恐しい百物語の真
 似などは、努々恐慎むべし。
 化ばかす狐狸はさもなくて人のこゝろのばけぬ間ぞなき

はじめに、百物語は作りごと
 ではなく、教えのためのもので
 あって、今もあると述べられて
 いる。そもそも、禍福は外から
 起こるものではなく、すべての
 禍福は自身の心から求めるもの
 であって、喜び悲しんで生涯を
 送るものだと説く（下線①）。
 特に、自ら招いた禍は逃れる術
 がないという。具体的には、家
 名滅亡の原因は子孫の奢りに原
 因があるといい、その滅亡の様

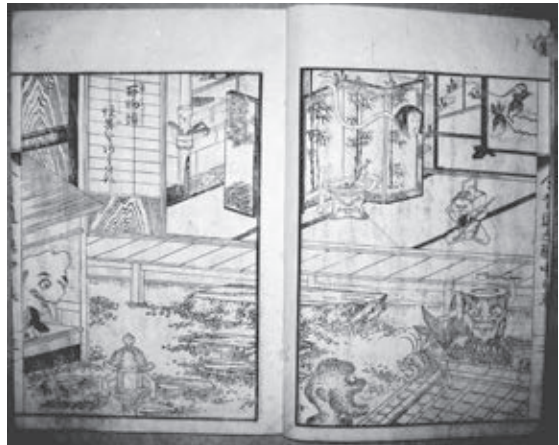


図14 今昔道の葉

子を述べてゆく（下線②）。先祖の築いた財産を不孝な子孫が潰してしまい、さらなる悪道に落ちてゆく様が述べられている。そして、先祖の徳を百物語の灯心に見立てて、その火を消してゆくというのである（下線③）。ここで百物語の見立てが判明する。百物語とは、先祖の徳という光を次々と消してゆくことの見立てであった。そして、その火がすべて消えた時には、百物語では化物が出るけれども、現実には家を失うという恐怖が待っているのである。このような恐ろしい状況に陥ってしまうことも、結局は本人が化物（身の破滅）を好むためだという（下線④）。次に、特に恐ろしい化物として、轆轤首をあげている（下線⑤）。後の行文から、どこまでも貢がせる女性を見立てたものと考えられる。さらには蔵の諸道具までが、手足を生やして動き出し、家を没落させた主人に恨み言を述べるというのである（下線

⑥)。そして最後に、すべての元凶である「百物語の真似」などをすべきではないと説いている（下線⑦）。すなわち、先祖の徳の光を消すことを戒めているのである。末尾の道歌は、化物とは狐狸ではなく人の心であり、化けない間がない（常に変化している）という。この話において、最も恐ろしい化物は、人の心なのである。

この話は、財産を減らしてゆく様子を百物語怪談会に見立て、人の心こそ化物であると述べている。このような化物観・怪異観が心学の中に見出されることは注目しておいてよいだろう。真の化物・恐怖を異界に求めるのではなく、身近な人の心や行動に見出すという江戸時代の心性が如実に表れているからである。

おわりに

本稿では、心学の化物を「見立化物」という観点から検討してきた。心学という、従来はあまり注目されてこなかった分野にも豊かな化物の世界が広がっている。「見立化物」の系譜はその中の主要なものである。そこでは、当時の倫理観から外れた人々が化物に見立てられており、教訓の材料とされている。心学の教えは、平易で親しみやすいものであり、江戸時代の社会に広く受け入れられたものであった。言い換えるならば、近世の一般的な人々の心性を映し出す鏡とでもいうべき資料群である。このように考えてみると、近世における化物観・怪異観の一端が見えてくる。すなわち、江戸時代において、化物とは現実から乖離した異界にいるモノばかりではなく、身近な日常生活・人々の心の中に潜んでいるモノでもあったのである。

「心学」の資料は、以上のように近世における化物観・怪異観の一端をたしかに内包している。今後さらに追求してゆくことにより、近世の心性、および文芸との接点を明らかにしてゆくこととしたい。

付記

本稿における翻字は、振仮名・踊り字は底本に従い、旧字・異体字は通行の字体に改めた。また、句点のあるものは底本に従い、ないものには句読点を付した。また、左訓はく > で示した。引用文中の下線・番号は引用者による。

引用文中に現在の観点からは不適切と考えられる表現があるが、資料を尊重する立場から改変を加えずに引用した。

『妖怪物狐心学』を除く資料の引用・画像掲載は架蔵本による。

矢口丹波記念文庫の方々には、『妖怪物狐心学』の調査に際して特別のご配慮をいただき、貴重な資料の閲覧・引用を許可していただいた。厚く御礼申し上げます。なお、『妖怪物狐心学』については、国文学研究資料館ホームページ「所蔵和古書・マイクロ／デジタル目録データベース」(<http://base1.nijl.ac.jp/~wakosyo/>)に全冊の画像が公開されている。

本稿は第45回国際日本文化研究センター国際研究集会「怪異・妖怪文化の伝統と創造——ウチとソトの視点から」(於国際日本文化研究センター、2013年11月26日)における口頭発表に基づいたものである。当日ご指導いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。また、ご指摘いただいた問題点は今後の課題として調査・研究を続けてゆきます。

本稿は科学研究費補助金(若手研究B「近世期怪異観の基礎的研究—近世怪異小説を中心として—」研究課題番号25770082)による成果の一部である。